

新フィヒテ主義者としての最初期ハイデガー

原子龍之介（東京大学人文社会系研究科）

修学時代から『存在と時間』までのいわゆる最初期ハイデガーが、フィヒテの『全知識学の基礎』（以下『基礎』）に関心を示していたことはよく知られている。にも関わらず、フィヒテとハイデガーとの思想的影響関係は、他の哲学者たちに比べると、あまり真剣に論じられてこなかったように思われる。その理由はおそらく、ハイデガー自身による主要なドイツ観念論者たちに対する評価が、彼らがハイデガーの哲学的体系に与えた影響をそのまま表しているものとして捉えられている点にある。

実際、フィヒテに対するハイデガーの評価は芳しいものではない。1928年から31年にかけて開講された『ドイツ観念論』講義では、フィヒテの知識学の試みに対し、「存在への問いとしての形而上学の問題を単なる自我の問題へと落とし込んでいく」という批判が為され、フィヒテは伝統的な近代理性主義者の典型例に他ならないとされている。

しかしながら、ある哲学者が他の哲学者に下した評価を、彼らとその哲学者の思想的影響関係を示す唯一の指標と見做すことは、両者の体系の本質的な思想的影響関係を明らかにするうえで適切とはいえない。また、その哲学者の理解が、どのような思想史的背景に基づいて行われたかについても、十分な注意が払われる必要がある。実際、キシールは早くから、ハイデガー哲学におけるフィヒテの影響の存在を繰り返し指摘している(Kisiel 1993)。それによると、ハイデガーは新カント主義の西南学派に属するエミール・ラスクの解釈を通じて「事実性」という語をフィヒテから受け継いだのだとされている。

ところで、昨今の新カント主義研究において、フィヒテ哲学の影響の大きさは度々指摘されるようになっていく。バイザーは新カント主義を「ナショナリズム、社会主義、行動主義、理解と感受性の二元論に関するダイナミックかつ量的な概念」という4つの基本的な点において、カントよりもフィヒテに近い」という意味で、「新フィヒテ主義」と呼ぶ(Beiser 2018)。

ラスクやリッカートら新カント主義の哲学からの影響を自覚していた最初期ハイデガー哲学の試み全体を、あえて「新フィヒテ主義の影響」という視点から読み解くために、本発表はハイデガーの最初期の講義および論文に着目し、それらの思想を「新フィヒテ主義」の思想的文脈に適切に位置づけることを試みる。その際私は、ラスクによるフィヒテの『1804年の知識学』の解釈の妥当性を検証した上で、後期フィヒテ自身の思想と最初期ハイデガーの思想の間に本質的な共通性があったと主張する。

本発表の結論を先に述べると、最初期ハイデガーは新フィヒテ主義者たち以上にフィヒテ的であった、ということになる。

その最大の特徴は、新カント主義哲学に顕著な「存在の超越論的範疇化」を後期フィヒテと同様の形で回避した点にある。

観念論の徹底を迫及した新カント主義者たちは、何か単に「ある」という「なまの事実 bloße Fakten」と「判断」との間に「不合理な跳躍 hiatus irrationalis」を認めてしまうという問題に突き当たった。ラスクはこれを、フィヒテの『1804年の知識学』に依拠しながら、「存在」とは分析的演繹によって自我などの概念から必然的に導出されないと同時に、あらゆる判断の形式的構成要素の一つであるような特別なカテゴリであるとするので、解決を試みる。

しかし、ラスクは『1804年の知識学』を「誤読」している(Bruno 2021)。当のフィヒテにとって「存在」は「動詞的に理解されるべき」であり、純粋に形式的な構成要素には還元され得ないものである。むしろ「存在」は、理性自身の「現実的な生の働きと実存において」、「純粋で自体的に明瞭かつ透明な了解の働き」によって把握されるのであり、この「一切の客観化する直観を超え」た了解の働きによって「客観と主観の間の跳躍(hiatus)を完全に埋め、両者を否定する」ことが可能になる。理性自身が反省を通じて、自らの「存在/ある」を直観的に了解することが出来る点に、「存在」そのものを直接把握する可能性が示唆されている。

ハイデガーもまた同様の見解を示している。確かに、教授資格論文「ドゥンス・スコトゥスの範疇論と意義論」の提出時点のハイデガーは、「存在」を超越論的範疇として扱うラスクの立場に留まっていた。しかし出版に際して付け加えた「結び」において、ハイデガーは明らかにこれを放棄しようとしている。むしろ彼は「我あり」という事実性、即ち自らの生の事実性を、我々自身がどのように自己解釈しているかという点に注目し、事実性を解釈すること自体が、事実性の可能性の一部であることを発見する。後の『オントロジー』講義において、この洞察は「現存在が自らの事実性を解釈することそれ自体が、事実性という存在性格の可能性の一つである」と表現されている。この『オントロジー』と『1804年の知識学』に見られる、反省を通じた「存在」の直接的把握というモチーフこそ、最初期ハイデガー哲学と後期フィヒテ哲学の本質的な共通性である。

参考文献

- Beiser, F. (2018). “Neo-Kantianism as Neo-Fichteanism”. In: *Fichte-Studien*. 45.
- Bruno, G. A. (2021). “Hiatus Irrationalis: Lask’s Fateful Misreading of Fichte”. In: *European Journal of Philosophy*. 30(3). 977-995.
- Fichte, J. G. *Gesamtausgabe der Bayerischen Akademie der Wissenschaften*. Frommann-Holzboog.
- Heidegger, M. (1985-) *Gesamtausgabe*. Klostermann.
- Kisiel, T. (1993). *The Genesis of Heidegger’s Being and Time*. University of California Press.